

# 大学で学ぶということ

米 山 高 生

## 1 はじめに

私は、大学生生活を充実させる唯一の方法は、「学びたいこと」を自分自身で発見することだと考えています。今日のような変化の大きな時代にあって、最終的に頼りになるのは自分の知的なスキルであり、大学の卒業証書だけでは通用しない時代がすぐそこにやってきました。大学で何を学んだかということが、自分自身にとっても、自分を評価する側にとってもますます重要となっています。しかしながら、「学びたいこと」を発見しても、それを実際に学んでゆく過程では、大学という場の特徴や技法を知っておくことが必要です。ここでは、大学で学ぶことの意味や、そのための技法などを、出きるだけ分かりやすい言葉で語りたいと思います<sup>1)</sup>。

次のような順序でお話を進めることにします。第2節では、新入生の皆さんの大学に対する期待と不安の解消へのヒントと「学びたいこと」を発見するためのアイデアを述べます。次に第3節で大学の主要な教育方法である「対話」形式を紹介し、この形式のもつ意味を解説します。「対話」形式が成立するためには、知的な基礎体力と基礎的な学識が必要ですが、この二つについてそれぞれ第4節と第5節で述べます。最後に視点をかえて、人生の目的という哲学的な問題について言及しながら、大学で学ぶということと、人生の目的の実現との間にはそれほど大きな隔たりはないということを明らかにします。

## 2 期待と不安の解消と「学びたいこと」発見の方法

### 入学の動機

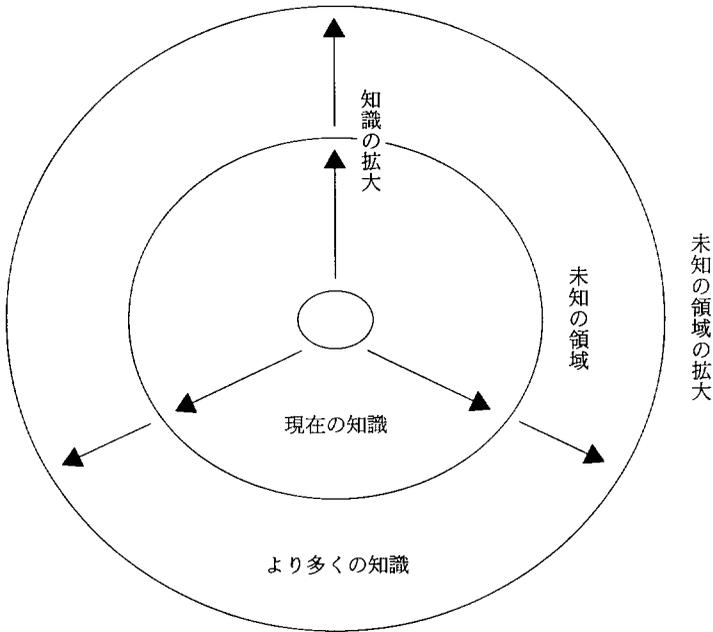
高校・予備校と大学の間になかならぬ溝があります。これは、大学の研究・教育に関する情報が、十分に受験生に行き渡っていないために生じたものと思われる。しかし原因は、それだけではないでしょう。受験生の側でも、「学びたいもの」を求めて大学の門を叩くのではなく、とりあえず偏差値的に入学可能な大学に入っておこうという姿勢が強いためとも考えられます。読み始めていただいた新入生のほとんどの方が、「学びたいこと」があつて一橋大学に入学したのはなく、合格したから入学したのではないのでしょうか。そして皆さんの胸中には、高校・予備校と大学との溝を前にして、大学に対する期待と不安が錯綜しているものと察します。このような期待と不安は、「学びたいこと」を求めて一橋大学に入学していたのなら、強く感じることはないものと思われる。

### 大学に対する期待と不安

一般的に過度な期待は、現実を知ることによって失望に変わります。しかしだからといって、最初から大学に期待をするなどというのは無茶な話でしょう。このことについては、ここでは、大学という場を信じて欲しいとしかいいようがありません。規律正しい受験生活から考えると、大学生の生活は自堕落なものに見えるかもしれません。反対に、大学生になつても、取得単位に縛られた学習とか、高校の延長のような基礎的な学習があることを知り、がっかりする人がいることでしょう。しかしながらこういったことを、表面的に判断せず、4年間という年限の大学という場をトータルに考えて、冷静に判断するようにしてほしいものです。

次に、新入生の皆さんの大学に対する不安の苛みから脱出するためのひとつの方法を指南いたしましょう。原理的な回答は、これまでの記述の中にすでに示唆されています。ひとことでいえば、「学びたいこと」を見つけることです。大学の教育カリキュラムの中には、皆さんの「学びたいこと」の原石がたくさん散りばめられています。チョンボ<sup>2)</sup>ばかりを履修せずに、「学びたいこと」を発見す

図 「学びたいこと」を見つける方法



るという観点から時間割を作成してみることをお勧めします。教官の個人的魅力であれ、学問に対する興味であれ、何かを惹きつけるものを感じれば、それでよいと思います。

「学びたいこと」を発見する方法

それでも「学びたいこと」が見つからない人は、それを発見する方法を、ここで特別に教えましょう。図をご覧ください。この同心円は、知識の増大と未知の領域の比例関係を示しており、知識は円の面積、未知の領域が円周です。つまり成長とともに知識（円の面積）が広くなるにつれて、わからないこと（円周の長さ）が多くなるというわけです<sup>3)</sup>。「学びたいこと」を見つけるには、知識を増やして、未知の領域を広げることによって、わからないことを増やせばよいのです。知識を増やすには、読書・思索・会話など様々な手段がありますが、大学と

いう場合は、これらの手段に対して十分な設備と機会を提供してくれます<sup>4)</sup>。

### 適性のチェックと柔軟で慎重な意思決定

もし幸運にも「学びたいこと」を発見したならば、それが、自分の適性にあっているものかどうかを、チェックすることをお勧めします。自分の能力や適性にあっていないものを選択すると、のちのち大変な負担になります。たとえば、数学が不得意なのに数理経済学を選んできたり、語学が不得意なのに外国史を選んでしまったりするのはあきらかに得策ではありません。イチローにとって、ホームランバッターに変身するために努力するよりも、少しでも早く一塁に駆け抜けることに努力を払ったほうが得策であるのと同じことです<sup>5)</sup>。

その結果「学びたいこと」が確定し、それが一橋大学という場で見出すことが出来なかったならば、その時点で本当の意味での「大学探し」が始まります。一橋大学は、「社会科学の総合大学」ですから、自然科学の学部はありません。そのため従来の組織では、工学士、理学士を取得したり、医師になったりすることは出来ません。自分の「学びたいこと」が、そのようなものであるとしたら、再受験を考えるべきでしょう。しかしながら、東京工業大学、東京医科歯科大学、東京外国語大学とのいわゆる四大学連合構想があり、複数学士号の取得も可能となっています。またいわゆる理系に属する教官もたくさんおりますので、社会科学を機軸に理系との境界領域を研究することは十分に可能です。このような可能性を十分に検討した上で上記の決断を行なってください。

## 3 「伝授」形式と「対話」形式

### 「伝授」から「対話」へ

第2節の冒頭に高校・予備校と大学との溝と述べました。この溝については、これまでに論じてきたこと以上の意味があります。高校・予備校が知識の伝授を効率的に行なう場所であったのに対し、大学では効率的な伝授よりも自分で考えることが重視されます<sup>6)</sup>。言いかえれば、高校・予備校では、教師と生徒という縦の関係での教授方法が主流でしたが、大学では、「対話」が重視されるようになります。大学の場合、講義形式であっても、よほどの大講義でないかぎり、学

生からの質問が許されており、そこでは「対話」の場が保証されているはずです<sup>7)</sup>。

「対話」というのは、話す主体が対等であることが前提ですから、まさに横の関係ということになります。しかしながら、教官と学生の知識には、当然のこととしてギャップがあります。そこで「対話」は、フィクションとして対等な関係を前提として成立することになります。そうなると学生は、ギャップを埋めながら、しかも自分独自の考えや意見を対等に論じる必要がありますので、図書館などを十分に活用し自助努力をせざるを得ません。大学における「対話」という方法は、このように考えると、学習や研究への「インセンティブな仕組み」<sup>8)</sup>ともいえます。

#### 「対話」の成立する前提条件

さらに「対話」形式は、それ以上の意味を持っています。「対話」は、基本的にオープンな関係でないと成立しないのです。この場合、オープンというのは、誰にでもその議論がわかり、誰にでも議論に参加できるという仮定のもとで、議論されるといことです。たとえば、数学的な表現は、万人に理解できるわけではありませんが、一定の学識がととのえば誰にでもわかるものであるはずです。要するに、ここでいう誰にでもわかるということは、素朴で幼稚だということではなく、シンプルで直接的だということなのです。さらに、「対話」では、いかなる権威も通用しません。教官であっても、間違いは間違いなのです。学生は、それを指摘するのに臆することはありません<sup>9)</sup>。

一橋大学における教育の「売り物」である少人数のゼミ教育は、正真正銘の「対話」の場です。大学の大量化によって、多くの大学でゼミナールが卒業のための必修単位から外される傾向が見られます。しかし、ゼミナールが、重要な「対話」の場であるとしたら、まさにそれは大学教育の中心的存在であり、伝統的にゼミナール教育が浸透している一橋大学では、そのようなことはありえないものと信じます<sup>10)</sup>。

#### 「対話」形式の厳しさとそれへの準備

大学教育の現場では、教員と学生の間の知識的ギャップや経験的な差異がある

ことは当然ですから、大学教育における「対話」は、すでに述べたように、両者が対等であるという関係をフィクションとして実現することによって成り立つものです。したがって、学生は、そのようなギャップを埋めるべく、努力することが要請されます。しかし「対話」形式の導入によって、対等な関係が、何もしなくても与えられると思ったら大間違いです。対等な関係での「対話」が、大げさに言えば、自分の人格までも賭けるような厳しさを含んでいるものであるということ強調しておきましょう。

ところで、ゼミナール形式の授業において、参加する学生の主体的な意識が必要だといわれます。私は、このような言い方を、あまり好みません。というのは、ゼミナール形式の授業の成否を、学生の意識の問題に還元してしまっているからです。この場合、「主体的」という意味は、ゼミナールにおいて、自分の意見を積極的に主張するというものですから、「主体的な意識」という次元の問題よりも、「対話」形式の授業に対する準備の問題であると考えの方がよいと思います。したがって、必要なのは、主体的な意識の変革よりも、さしあたり「対話」形式の授業に対する対応方法を知ることでしょう。対応方法としてまず重要なことは、繰り返しになりますが、「対話」というフィクションによって、当面は無視されている教師との間にある知識のギャップを埋める自助努力を行なうことです。ゼミナール形式の授業で指示されたテキストを読まずに参加することは、「伝授」形式の教育によって培われた甘えといわざるをえません。

#### 4 知的な基礎体力

##### 大学での学習・研究に必要なこと

第3節で述べた、教師との間の様々なギャップを埋める努力は、「伝授」形式の教育法では、予習の重要性ということになりましょう。しかし、狭い意味での予習以上に重要なことが二つあります。ひとつは、私が「知的な基礎体力」と呼んでいるものであり、もうひとつは語学や統計学など、学術的なコミュニケーションのために最低限必要であろう技法の体得です。前者について本節で詳しく解説し、後者については次節で簡単に説明することにしましょう。

## 知的な基礎体力

私たちは、日ごろから、見て、聞いて、話しているわけですが、これらの能力の基本的な習得については、あまり気にとめていないのではないのでしょうか。しかし、じつは大学での学習・研究活動において、「みる・きく・はなす」ことは、大変重要なことなのです。私は、「みる・きく・はなす」という基本的とも思われる動作の中に、知的な基礎体力を身につけるためのエッセンスがあるものと考えています。

### 「みる」という行為

「みる」ことは、眼で視ることばかりではありません。読書は字を見ることに始まり<sup>11)</sup>、イマジネーションの世界を観ることもありますし、物事の本質を見ることがあるかもしれません。「みる」ことは、「理解」するための第一歩です。また「みる」には、時間が必要です<sup>12)</sup>。視覚的に画像として網膜に映すことだけでは、「みる」ことにはなりません。ゆっくりみること、これがよりよく「みる」ためのもっとも重要な第一歩です。ここでいう「ゆっくり」とは、「わざわざそのために時間を使って」という意味と考えてください。

テレビによる映画鑑賞では少しも頭に残らないのに、映画館での鑑賞は強い印象を残すことが多いですね。その違いは、映像の大小や音響の良さばかりではなく、映画の場合は、わざわざ時間を使って、観ようとして見ているからであると思います。

### 見えないものをみる

ものごとを「ゆっくり」とみると、見えてこなかったものがみえてきます。たとえば、私たちが、普段の生活でものごとをありのままに見ているのではなく、見たいようにしかみていないことがわかってきます。さらに自分をも見ることになります。社会的には、他人をとおしてしか表現できない自分を、客観的に見ることは難しいのですが、自分をゆっくり見つめることによって、自分自身をよりよく理解する道が開けてくるはずで、「みる」という行為を尊重することは、その人の人間性に深みと落ち着きを与えるばかりでなく、人間と人間がぶつかり合う「対話」の中で、創造的なものが生まれるための必要条件です。

## 「きく」という行為

「きく」という行為も、単に聴覚器官が反応することだけに限定されません。私たちは、耳以外でも聴くことができます<sup>13)</sup>。そして「きく」という行為にも、時間が必要です。「うわのそら」で聞いていたり、いわゆる「ながら族」で他人の話の聞いたりするのは、わざわざそのために時間を使っているわけではありませんから、本質的には「きく」行為とはいえません。「きく」ことは、「みる」と同じく、わざわざそのために自分の時間を費やすことによって、意味のある行為となるのです。

## 他人の話を受けない人

残念ながら大学の中にさえ、聴覚器官が生理学的に反応しているにもかかわらず、他人の話を受けない人がいます。また人の話を聞かないことが、自己の信念や決意の強固さであると勘違いしている人も見かけます。他人の話をよく聞くことは、他人の言いなりになるということではありません。そうではなくむしろ他者との「対話」を成立させるための条件であり、相手を理解した上で、自分を表現することによって、より高い共通理解に到達する重要な前提条件なのです。

## 聴くに聴けないこと

「きく」ことが、人間の存在と深く関わっている大切な行為であるということが、実によく描かれているエッセイを、最近の夕刊のコラムで読みました。少々長くなりますが、その一部を引用させていただきます。

- ・ 「聴きたいことほど聴けないという話を、あるホスピスのベテラン看護婦さんから聴いたことがある。告知を受ける意志、そしてケアする側でひっかかるもの、たとえば家族のこと、お金のことがそうなのだが、それだけではない。もっと大事なことで、ほんとうに聴きたいことほどなぜか聴けない……。そう看護婦さんはつぶやくように漏らされた。(中略)聴くというのはほんとうにむずかしい。聴きすぎてもいけないし、聞き流してもいけない。ひとはほんとうに苦しいことは口にしないものだし、自分にとってほんとうに大事なことを語る前には深く黙り込むものだ。つまり、辛抱強く待つ耳があってはじめて、言葉が生まれるのである。迎え入れられるという、あらかじめ

の確信がないところでは、ひとは言葉を相手にあずけないものだからだ。

それでも聴くことが大切なのは、人が苦しみについて語りだすとき、そのひとは自分の苦しみにこれまでとは違った仕方がかかわろうとしているからだ。それを脇から支えるのが、聴くという仕事だ。(後略)<sup>14)</sup>

### 情報理論を超えた情報

ところで、デジタル技術を基盤とした情報理論では、伝達されるべき情報があらかじめ存在し、それがプロトコルに従って、他者に伝達されるということが前提とされています。この前提がコンピュータの発達やネットワーク技術の進展を飛躍的なものに行っていることは事実ですが、私たちは、情報理論の想定する情報伝達を超えた「情報」を聴く必要があることを忘れてはなりません。「苦しみにして語りだす」人が、それを語った瞬間には、まさに「これまでとは違った仕方」で人生にかかわってゆくわけです。したがって、それを真摯に受け止めるならば、聞き手も変わらざるを得ません。このように、人間関係の中で変化する語り手と聞き手の間の綾を「きく」ことが大切なのです<sup>15)</sup>。

### 自分の頭で考えること

「みる」および「きく」という行為は、ともに視角・聴覚器官の生理的な反応にとどまるものではなく、思考するという高度な精神現象に深く結びついているものだということがおわかりになったことでしょう。つまり、よく「みる」こと、よく「きく」ことの習慣を身につけることによって、物事を自分の頭で考えることができるようになるのです。しかし自分の頭で考えるということは、簡単なことのように思われますが、私自身の経験からいっても、大変難しいことです<sup>16)</sup>。私は、その理由として次の二つがあると考えています。

第一に、人は、自分を少しでも大きく見せたい時に、自分の頭で考えることを放棄することがあります。読みかじった評論家の意見を鵜呑みにしたり、既成の価値観を無批判に信じたりすることによって、さも経験豊かで学識豊富に見せたい人がおりますが、それが自分の頭で考えたことでない場合には、すぐにメッキが剥がれてしまいます<sup>17)</sup>。私自身も、自分の頭で考えるという素朴な行為を、常に努力していなければ維持することができず、しばしば反省しているということ

を、告白せざるを得ません。人間は、我執を捨てられない弱い存在であるために、きわめて素朴で簡単なことが出来ない場合があるのです。

第二に、大学までの教育において、「みる」および「きく」という基本的な行為が重視されていないと思われることです。受験という競争関係の中で、学力とは、情報処理能力の高さのことをいいます。そこでは、与えられる答えが確定しており、いかに早くそれを見つげられるかという能力が問題とされているわけです<sup>18)</sup>。そのため、受験という目標を掲げた場合、どうしても限られた時間で、できるだけ多くの情報を効率的に授受することが重視されるはずですが、それによりじっくり考える習慣が身につかない学生が多くなることは否めません。

なお、学力とは、答えのある問題に対する対応能力です。したがって、見えないものをみる能力とか、聴けないものをきく姿勢などは、学力と結びつけて考えられていません。「対話」形式を尊重する大学においては、答えのある問題よりも、あらかじめ答えが用意されていない問題の方が重要です<sup>19)</sup>。そのような問題に取り組む時に、狭い意味での学力がまったく役に立たないことがあります。その時に、まさに力を発揮するのが、私が知的な基礎体力と呼んでいるものであるのです。

#### 「はなす」という行為

「みる」および「きく」という行為は、これまでに述べてきたように必ずしも受動的な行為ではありませんが、他者があってはじめて成り立つものです。これに対して、「はなす」ことは、自分から他者に能動的な働きかける行為という意味で対照的なものです。

「はなす」という行為は、発話によるものだけとは限りません。手話はもちろん、それを、自己表現の手段と考えれば、電子メールも「はなす」行為に入ります。大学の学習や研究においては、自分の考えたことを、適当な手段をもちいて、しかも適切に表現する能力が重要となります。コンピュータを活用して、学習・調査したことを発表することを、プレゼンテーションと呼んでいます。このような技法についてある程度学んでおくことは必要でしょう<sup>20)</sup>。

さらに、それにもまして、自分の考えを、的確な言葉で表現する能力を培うこ

とも大切です。なぜならば、大学は、高校・予備校と違って、拙い表現力に甘えることが許されない場所だからです。上述した「対話」形式においては、対等な関係がフィクションとして想定されていますから、劣った表現力は自分の力で克服せざるをえません。また、たとえいくら高邁なことを考えていたとしても、それを表現できなければ「対話」においては、意味を持たないのです<sup>21)</sup>。

## 5 「対話」成立のための基礎的な学習の必要性

### 基礎的な学習の必要性

私が知的な基礎体力と呼んでいるものについて詳細に述べてきましたが、前述したようにもうひとつ大学の学習・研究に必要なことがあります。それは、大学という学術的な土俵に上るための基礎的な学習です。これまでに強調してきた「対話」形式の重視は、知識の過不足については、とりあえず不問とするという仮定をおいて成り立つものでしたが、そこで用いられる最低限必要なルールのようなものについては、基礎的な学習によって身につける必要があります。たとえば数学的表現を理解していない者が、数理経済学に関する「対話」に加わることは、無謀なことであることがおわかりでしょう。私見では、高校までに履修してきた学習内容を完璧に理解していれば、それに多くを付け加える必要はないものと考えておりますが、それでも選択する予定の学問領域によっては、より専門的な学習を必要とする場合もあります。

### 「対話」成立のために習得すべき基本的技法

大学での学習・研究のために必要な基礎的な学習には、「対話」を成立させるための必要条件である論理的思考、数学的理解、および語学的能力などがあります。具体的には、統計学的な基礎知識、基本的な数学的理解、母国語以外の言語をとおした自己表現の習得などです。これらは、予定している専門領域によってその程度は異なりますが、大学における「対話」を成立させるために大切な条件を形成しています。

このような基本的な能力の獲得には、高校・予備校と同じく伝授という教授方法が、効率的です。カリキュラム的には、大学1、2年のうちにこのような基本

的学習を終了し、3年からの後期ゼミナールにのぞむわけです。そのため、高校・予備校と同様の教授法による講義がある程度されていることはやむをえません。この学習には、若干の労苦をとまいませんが、大学入試をくぐり抜けてきた新入生の皆さんならば、講義をサボらないかぎり、たいした壁ではありません。がんばってください。

## 6 人生の目的

### 人生の最大の目的

「人生最大の目的は何か」と訊かれて、言葉に詰まる人も多いことでしょう。人生という超長期的な期間を前提とする場合、カネや地位や名誉などの通俗的な目標では、普遍性に欠けるように思われます。とすると、信念とか信条のような抽象的な目標を設定するしかないでしょう。

ある日本企業の最高経営者が、新聞のコラムで、自分の人生最大の目的は他人との信頼関係を築くことであると書いていました<sup>22)</sup>。この目的は、すべての人にあてはまる目的ではないかもしれませんが<sup>23)</sup>、少なくとも、すべての人が目標のひとつに加えて欲しいことです。とりわけ、卒業後にビジネスの世界に雄飛していこうとする人には、この目標を大切にしていだきたいと思います。というのは、ビジネスの世界こそ、人間と人間の信頼関係という土台の上に築かれているものだからです。

### ビジネスと信頼関係

信頼関係を築くために行うべきことについて述べる前に、ビジネスと信頼関係の関連について、若干言及しておきたいことがあります。ビジネスは、生き馬の目を抜く世界であるとか、騙し合いで油断のならない世界であるといいますが、このことは間違っていないでしょう。しかし、だからといって、信頼できない社会にビジネスは根付きませんし、またビジネスで信頼関係が軽視されることはありません。ここで言う信頼関係とは、ア prioriに存在するものではなく、人間と人間の繰り返しの交渉を通して築き上げられるものです。したがって信頼というのは過去の経験にもとづいて、将来にむけて発揮されるものなのです。

では、もし過去の経験が存在しなかったら、どうなるのでしょうか。最初がなければ、何も始まらないので、まずは信頼することから始まらなければなりません。そして相手が信頼を裏切った場合には、それが貴重な経験となります。もし最初に他人を信頼しない場合には、裏切られることがないかわりに、経験を蓄積することができません。裏切られることを警戒するあまり、安心できる相手としか付き合うことができない者は、安心社会に閉じこもることができても、信頼社会を築き上げることが出来ないのです<sup>24)</sup>。

ビジネスは、このような意味で、オープンな信頼社会（関係）をベースに発展すべきものであって、けっして安心社会の中で展開されるものではありません。そのため、ビジネスの世界にあって、他者と信頼関係を築くことは、必用不可欠なことであるといえます。

#### 信頼関係を築くために行うべきこと

人間を信頼するための方法について考えてみましょう。人間を信頼することが人生最大の目的であるとした、上記の経営者の方法は、きわめて簡潔なものです。彼によれば、まず人の話をよく聞き、それを自分の頭の中でよく考えること。そして、出来るだけ分りやすく、シンプルなかたちで自分の意見を表明し、表明したら必ずそれを実行することです。

彼の一連の行為は、私の言葉で表現しなおしてみると、「対話」の実現と「対話」の結論の実行ということになります。したがって、「自分の頭の中でよく考えること」までは、知的な基礎体力の発揮によって、そして「出来るだけ分りやすく、シンプルなかたちで自分の意見を表明」するためには「対話」成立のための基礎的技法によって、可能なものとなるでしょう。ここまでは、大学教育において身につけられることです。

しかしながら、自分が表明したことを必ず実行するということは、個人の生きて行く姿勢にも関連することであり、大学での学習ばかりでなく、社会的な実践の中で、裏切られたり、裏切ったり、といった苦い経験を重ねながら、実践的に身に付けてゆくものなのかもしれません。

人の話をよく聞き、自分の頭でよく考え、出来るだけ分りやすく、シンプルな

かたちで自分の意見を表明し、そして表明したら必ずそれを実行するという信条。このことは、信頼関係を築くための唯一最良の方法です。さらに信頼性は、その人の責任感とも深く関係しますから、ビジネスおよび企業組織の中である種のリーダーシップを発揮してゆく上でこの信条の実践は、必要不可欠な個人的資質です。

### 人間であることの使命感

私は、「人間を信頼する」ということは、人間であることの使命感の表明だと受け取っています。「人間を信頼する」のは、人間の一人である自分のためでもあるのです。また、人間を信頼してもいないのに、信頼していると表明している偽善者では、信頼関係を築くことは出来ません。なぜなら、信頼関係は、前述したように、盲目的に他人を信用することによっては成り立たないからです。

ところで、「人間を信頼する」ことを人生最大の目的として、そのために上述の信条を実践していると表明した日本企業の経営者とは、日産自動車のカルロス・ゴーン氏です。小論で引用した彼の言説と経営者としての彼の「成功」とを安易に結びつけることには慎重であるべきでしょう<sup>25)</sup>。しかし異文化の大企業の再建を任された経営者が、このようなすばらしい目的と信条を持っているということは、おおいに注目すべきことでしょう。

## 6 小括

学問への招待の特集への寄稿依頼を受けて、まず過去の特集を紐解いてみました。これまでの特集論文には、3つのタイプがあります。すなわち、第一に専門とする学問分野に関する紹介論稿、第二に専門とする分野がいかに面白いかをアピールする論稿、第三に大学での学習、研究に関する入門的な論稿です。小論を分類すれば、第三のタイプに属します。しかも出来るだけ平易な語り口で、しかも抽象的でなく、経験にもとづいた記述を心がけたので、いわゆる論文形式ではない文章になりました。たとえば、論文では通常使わない「私」という主語を使っておりまして、小見出しも多用しました。また引用文研や引用個所などについて、簡略化したところがあることをお断りしておきます。

最後に、この文章をを読んでいただいた、とくに新入生の皆さんに、どのような反応を示してもらいたいのかということを書いて締めくくりとします。私は、皆さんに「わかった」と言ってもらってもそれほど嬉しくありません。残念ながら「わかった」という人に限って、わかっていない人が多いのです<sup>26)</sup>。私は、「わかる」というのは、「変わる」ということであると思っています。前述した引用文の中に、次のような個所がありました。「人が苦しみについて語りだすとき、そのひとは自分の苦しみにこれまでとは違った仕方ではかかわろうとしている」。まさに、これと同様に、「わかる」というのは、私たちが「わかった」という対象に対して、以前とは違った仕方ではかかわることなのです。したがって、これを読んでいただいた方が、大学およびそこの学習や研究に対して、これまでとは違ったかかわり方をしてくれるようになってくれたら、こんな拙い文章でも、「学問への招待」という特集に対する責任を果たせるのではないかと、勝手ながら期待しております。

- 1) ここでは、商学部で「何を学ぶか」については言及しません。しかし幸いにも、この小論を執筆中に、日本経済新聞「やさしい経済学」コラムで次のような連載がはじまりましたので、縮尺版を利用してぜひ読んで下さい。野中郁次郎「序論、何を学ぶか」2002年1月3日より連載開始。
- 2) 一橋大学の学生は、単位の取得が容易な講義のことをチョンボといいます。チョンボとは、麻雀用語で「失敗」という意味ですが、いったい誰の失敗なのでしょう。
- 3) このような図式による説明は、私のオリジナルではなく、『ものぐさ精神分析』で有名な岸田秀氏のアイデアからの引用です。
- 4) 自宅でも読書・思索・会話が出来ますが、受動的な姿勢では知識は身につかないようです。たとえば、寝転がって雑誌を読むことは読書とはいわないし、テレビを見てボーッとしていることは思索とかけ離れたものです。知識は、心身が能動的な状態の時に身につくものですから、知識を獲得するには、自己規律が必要であることを自覚して欲しいと思います。
- 5) 昨年の大リーグでのイチローの活躍は、素晴らしいものでした。日本人が活躍すると少しだけ気になることがあります。イチローが首位打者になれたのは、

内野安打が多かったからです。このこと自体は、まったく恥ずかしいことではありません。しかし本塁と一塁の間の距離がもう少し広がったらと思ったアメリカ人がいたことでしょう。そこでスポーツという名で呼ばれている競泳やスキー競技において、過去に実際にあったように国際ルールが突然変更されるということが、大リーグでも生じるかもしれません。しかし私は、大リーグは、アメリカ人にとってスポーツ以上のものであるという理由で、イチロー・ルールはありえないと思います。スポーツはルール先にありきの競技ですが、大リーグや大相撲は、スピリッツ先にありきの競技だからです。アメリカは契約社会といわれており、ルールに従っていれば何でも許される社会であると考えられていますが、大リーグという社会はそうではないようです。ルールブックから外れない行動をした新庄に対して、デッドボールが見舞われたという事実は、まさにそのことを示しています。イチローによってルールが変更されるということは、アメリカ人のプライドが許すはずありません。

- 6) だからといって高校・予備校が、人格陶冶の場でないといっているわけではありません。ここで強調したいのは、高校では指導要領に従って必要な事項を教師が生徒に伝授するという教授法が主流であることです。大学教育においても、最低限必要な基礎的知識を伝授する場合には、同様の教授法が採用されます。要は、教えるべき内容によって、教授法が異なるというわけです。
- 7) 個人的な勉強不足から生じる質問についても、たいていの大学教師は、講義の進行を妨げない限り答えてくれることでしょう。さらに、多くの教師は、対話形式が成立するような良い質問に遭遇した場合には、講義後に十分に時間を使って回答してくれるはずで、なぜなら、それこそが研究者のメシのタネなのですから。
- 8) 「インセンティブな仕組み」という用語は、ジャーゴン (専門用語) です。ここでは、あえて説明は致しませんが、簡単な用語解説では飽き足りない方には、組織経済学の標準的なテキストである、ミログラム＝ロバーツ『組織の経済学』NTT 出版を読まれるとよいでしょう。
- 9) 次のエピソードは、「対話」を考える上で興味深いものです。実際に新聞の三面記事に掲載されていた出来事です。ある小学校で、「4本脚の蝶々を見つけたよ」と言い張った小学生がいました。普通の先生だと、いたずらっ子に2本もがれたものだと思って気にもとめないでしょう。昆虫の脚が6本というのは常識ですから。しかしその先生は、「そう。それならこんど採ってきて私に見せてね」といったのです。その小学生ははりきって4本脚の蝶を採ってきたので

す。しかも2本もがれたものではない蝶を。実は、ある種のタテハチョウは、2本の脚が退化しており、形態としては4本脚であることが、専門家の間では知られていることなのです。したがって、小学生の言っていたことは、正しいのです。柔軟な考えをもって、相手の意見を尊重することによって、その小学生と先生の間には「対話」が成立したのです。

- 10) 大学におけるゼミナールの選択は、大げさではありますが、その人の一生を決定づける可能性を秘めています。目先の利害とか、友人との競争心などで安易に選択しないようにしてください。それぞれの方に、多様な能力が備わっているわけですから、それぞれ独自の選択基準があるはずであります。選択基準は、かならずしも研究領域に限定する必要はないものと思います。
- 11) 点字読書であろうと、「みる」という行為にはかわりないものと思います。違いは眼の代わりに指を使っていることだけです。
- 12) 「みる」という行為の媒介なしに「理解」することがあるとすれば、それは「悟り」と表現できるのかもしれませんが、「悟り」は、大切な概念だと思うのですが、大学教育の中では、正面から取り上げられていません。その理由は、大学が、西洋で誕生した制度であって、西洋では、「悟る」という概念が、「はっきりとよく理解する」とか「実感としてよくわかる」としか解釈されていないことと関係がありそうです。
- 13) 「きく」という行為が、他人の考えを受け容れて意義を認識することだとしたら、音声に對し聴覚器官が反応するだけが「きく」ことではありません。香をかき分けることを「香を聞く」と表現しますが、この用法は、日本語で「きく」という表現がより広い概念であったことを物語っています。
- 14) 鷲田清一「聴くに聴けないこと」『日本経済新聞』夕刊2001年12月26日付第一面コラム「あすへの話題」より一部省略して引用。
- 15) 芸術の情報伝達も同様です。芸術家のメッセージをプロトコルに従って解読する行為と同時に、隠されたメッセージまでも読み解くという行為が、解釈する側に必要となります。音楽のような再現芸術の場合は、そこに演奏者（解釈者）が介在することによって、さらに複雑なものとなります。演奏者も作曲家のメッセージをプロトコルに従って解読するだけの存在ではありえないためです。解読・再現・解釈などの行為の中に、芸術の発信者と演奏家（解釈者）と聴衆の間に特別な関係が生まれるのですが、それは情報理論でいうところの「双方向性」ではなく、ある種の「共犯」関係とも表現できるようなものなのです。

- 16) 自分の頭で考える習慣の大切さは、どの大学教師も感じていることのように、毎年の「学問への招待」をみると、必ず誰かが触れているほどです。たとえば大橋和彦「知識の時代に『学ぶ』こと」『一橋論叢』1998年、4月号に言及されているエピソードには、現場の教師として笑えないものがあります。
- 17) 自分を大きく見せたいという動機は、自己顕示欲の一つの現れであり、必ずしも否定すべきことではありませんが、ここではその現われ方が、「他人のふんどし」に依存しているということを批判しています。他方、自分の頭で考えるということは、自分勝手にわがままな姿勢とは、本質的に異なるものです。自分の頭で考えることによって、他人の意見を尊重するという「対話」に必要不可欠な条件が生まれてこなければなりません。
- 18) ここで受験体制を全面否定するつもりはありません。また情報処理能力に限った狭い意味の学力を身に付けることを悪いことであるとも思いません。学力を否定するのではなく、本文でいう知的な基礎体力の重要を強調したいというのが、私の考えです。学力が研究者としての潜在能力のひとつにすぎないということは、学力の点で最高であるとされる東京大学よりも京都大学出身者にノーベル賞受賞者が多いということからも推察できます。ところが、京都大学の学生は、けっして学力に劣るわけではありませんので、研究者の資質として学力が重要であることを否定できません。ただし人間の評価は多面的であるべきなので、ノーベル賞受賞という基準だけで、全国の大学を一律に評価することはできません。個人的には、学力よりも知的な基礎体力をより重視してもよいように思います。
- 19) 「学問への招待」特集の青島論文は、同様のことを、より自分の体験にひきつけて興味深く語っています。青島矢一「『社会科学を学ぶことがどうして将来役に立つのか』について考えたこと」『一橋論叢』1997年、4月号。
- 20) プリゼンテーションにおいて、ともするとパソコンの技法におぼれて内容がおろそかになることがありますので、注意が必要です。またいわゆる見栄えのよいプレゼンテーションを目指すのではなく、内容をより効率的・効果的に伝えるプレゼンテーションを目標とするということを忘れないようにすることが大切です。
- 21) こういった場合にこそ、聴こえないものをきく能力を相手に発揮してもらえばよい、といった反論が生まれるかもしれません。しかしそれは単なる甘えに過ぎません。なぜならば、自分の拙さを他人の能力に補完してもらいたいという一方的な期待だからです。

- 22) 『日本経済新聞』の文化面の「交遊抄」というコラムに掲載されていました。
- 23) 自然とのかかわりを重要視する人もいるでしょうし、人生は無常であるとして自己の透徹した精神状態を追求する人もいることでしょう。しかし Captains of Industry を理念とする一橋大学に入学された皆さんには、人間とのかかわりを重視するタイプが多いことを期待します。
- 24) この考えは、全面的に、社会学者山岸俊夫氏に依拠しています。より詳しくは、山岸俊夫『安心社会から信頼社会へ』中公新書を参照して下さい。
- 25) 彼は現時点において成功していますが、それは、旧経営陣が続投したと想定した場合の状況との比較における相対的な成功です。彼の成功がより確かなものとなるかどうかは、今後の業績を見守る必要があります。また彼の「成功」から、彼を神聖視する兆しも見えますが、彼はあたりまえのことをやっているだけだと思います。むしろ、あたりまえのことが出来なかった日産の旧経営陣とわが国のビジネスシステムへの反省が必要でしょう。カルロス・ゴーンに関する書物はたくさんありますが、『一橋ビジネスレビュー』2001年冬号に、彼のインタビュー記事が掲載されています。面白いので読んでください。
- 26) なぜかという、「わかった」と言った時点で思考停止してしまう人が多いためです。「わかった」と思っても安易に思考停止してはなりません。その後、語り手が真実を語り始めるかもしれません。早合点をなくす方法は、小論という知的な基礎体力の一種の「きく」という行為をより大切にすることです。早合点する人には、おしゃべりな人が多く、また自分が話し上手だと勘違いしている人もるように思いますが、「話し上手は、聞き上手」という諺を肝に銘じておくべきでしょう。自戒もこめて。

(一橋大学大学院商学研究科教授)